



TITLE:

名前のいろいろ(四)

AUTHOR(S):

天文臺人

---

CITATION:

天文臺人. 名前のいろいろ(四). 天界 1923, 3(28): 106-108

ISSUE DATE:

1923-03-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/159855>

RIGHT:

# 名前のいろく

(四)

## 天文臺人

### 四、星座のつき

星座の話について尙書き加ふべきものに支那の星座がある。支那の星座も矢張り幾つかの星をつらねて種々の形になぞらへたもので、星宿と稱へたものが是れに相當するであらう。星宿とは月々の月の宿の言ひで、二十八宿が即ち夫れである。

角亢氏房心尾箕 斗牛女虚危室壁

奎婁胃昂畢觜參 井鬼柳星張翼轸

角亢氏房なきが夫れく龍の角や亢(ノド)等に見立て、あり、又斗は南斗も稱せられ斗の形をしてゐるのであるが他の各々の星宿も夫れくある形を表はしてゐるものであるかどうかは今の處一寸判り兼ねる。

此外に北極星を中心にして帝室及朝廷の風を模し、紫微垣と稱して帝あり太子あり又后宮なきを含むと共に上、少の宰丞・輔・弼なきの星を以て取り圍んでゐるのであるが、是れも同じく星座の仲間数へてよいであらう。

併しながら其構圖に於て東西兩洋の星座が全然趣きを異にしてゐる點は、さこ迄も面白いことである。

### 五、星

數ある星の名前の中、一番我々に耳順れてゐるものはバイエルと呼び方であらう。夫れは十七世紀の始めバイエルが創めたもので同じ星座に屬する星を明るいものから順番にギリシヤ文字の $\alpha, \beta, \gamma, \dots$ で番號をつけたものである。

即ちアンドロメダ星座の $\alpha$ 星、大熊星座の $\beta$ 星といった譯であつてそれにはチホ、ブラエ星表の七百七十七星に更に五百の星について行つたのである。

其につき、當時は何れ正確な光度の評價は出來てゐなかつたのであるから現今の光度測定の智識から見て、明るさの順序に不同があつてもこれは大目に見て置かねばなるまい。

然し果して觀測の誤差であるか又は元々明るさの順序が入れ違つてゐるか如何さいふことはそこに面白い問題を提供するものであつて、よく例に出されるものは双子星座の $\alpha$ 星 $\beta$ 星との關係である。 $\alpha$ 星は二・八五、 $\beta$ 星は二・九九の二星からなつてゐるが二つでもつてやつと一・六等級の光度を有するに拘らず、 $\beta$ 星は一、二等級の光度を保有してゐるのである。そこに $\alpha, \beta$ の順序が前後してゐることが言はれる。

しかし此様な前後は少しく穿鑿すれば他にもザラにあるので一々擧げるに堪へ難い位である。

其二、三について光度の等級とスペクトル型とを擧げるこ

星座名	$\alpha$ 星	$\beta$ 星	$\gamma$ 星	$\delta$ 星
龍	三・六 <sup>等</sup>	三・〇	二・四 <sup>等</sup>	三・二 <sup>等</sup>
ヘルクレス	三・三	二・八	三・八	三・二
白鳥	一・三	三・一	二・三	三・〇
双子	一・六	一・二	一・九	三・五
射手	四・一	三・六	三・一	二・八
鯨	二・八	二・二	三・六	四・〇
オリオン	〇・九	〇・三	一・七	二・五
	$M_a$	$B_{sp}$	$F_2$	$B$

× は二重星

殊に射手星座の如きは更に

一・九 と二・七  $\eta$  三・二  $\lambda$  二・九  $\sigma$  二・一

さいつた調子であるから、勿論嚴密にいへば決して明るさの順序で名付けられたものではないことは明かである。

且又、當時の等級即ちトレミー星表の等級の順を追つてゐるさいふことも言へないことが知られるのであるが、大體に於て當時の等級順を見て宜しいことである。

尙ほその昔は星の名を呼ぶのに随分厄介な呼び方をしたもので例へばオリオン星座について申せば

$\alpha$  星 右肩にある色赤き輝星

$\beta$  星 水に觸れてゐる左爪先きの輝星

$\gamma$  星 左肩にある星

$\delta$  星 腰帶の中にある三つ星の最つ先きの星

$\epsilon$  星 その中央

$\zeta$  星 三つ星の最後の星

$\eta$  星 劍の柄にある星

$\theta$  星 劍の先きに並ぶ三星の中央

$\iota$  星 その南の方の星

さいつた工合である。校訂トレミー星表のラテン名から書き取つたので譯違ひの所は平に御容謝であるが先づ斯ういつた工合である。

茲で $\beta$ 星の「水に觸れてゐる云々」之言のは足元を洗つてゐるエリダヌス河の流れのことであらう。又腰帶の三つ星と劍の先の三星について三つ宛の各々を一方は赤經で區別し片々は赤緯で區別してゐることは面白いと思ふ。

更に茲で注意すべきことは、其頃の星座を表はす圖は天球の外面から見た所を記してゐた者がバイエルによりて内面から見た圖に描き直されたのであるから左右が轉倒してゐることである。是れは止むを得ない譯でオリオンが楯を左手に持つてゐたものが右手に持つことになつたのである。

それで若し其儘で昔流の呼び方をするならば $\gamma$ 星は有肩にある星と云はねばならない筈である。

この流儀でいふ双子座の $\alpha$ 星 $\beta$ 星は

α 星 先きに行く双子の頭にある星

β 星 後から行く双子の頭にある色赤き星

なるので、然して此等二星のトレミーによる光度の評価は共に二等級となつてゐるのであるから、バイエルが α、β 星を先行後隨の順につけたことゝうなづかれる所であらう。

さて前に返つてバイエルの方法で一つ星座にギリシヤ二十四文字を費ひ盡して終へばさうするか云へば、次にはローマ字を使用する。ローマ字の小文字をアルファベット順に使用するのである。其内、α は α と紛れ易いから小文字の代りに大文字 A を使つてゐて A、B、C となるが然しアルゴ星座を分割した四つの星座にはローマ字の小文字から始めて更に大文字で補つてゐるのであらう。

さり乍ら此様な命名法は極くあら方な星まで切り上ぐべきであつて、其儘さ迄も押し進めるといふことは有つて益なく畢竟繁雜を加へるばかりで、折角の命名法の妙味を減却するものと言はなければならぬ。さも角も、此の命名法に従ふならば是非星座の領域を正確に定めねばならず之を定めずしては一步も進むことが出来ない筈である。その領域の正確から來た忽ちの例は駭奇星座に γ 星なく、ベガス星座に δ 星のないことである。しかもお隣りの牡牛星座から β 星を拉し來つて駭奇星とし、アンドロメダの首 (α 星) を取り

來つてベガス γ 星としてゐるに至つては少々參らざるを得ないのである。

### 一八三二年九月二十一日の皆既日蝕の寫眞 口繪の

太陽のコロナの美しい寫眞は教授キヤムベルの撮影にかゝるものである。此寫眞はリック天文臺のクロツカー日蝕探險隊使用の五吋フロイドカメラで以つてオーストラリヤのワラルで撮影されたものである。燒直しは原寸のまゝである。コロナの光芒の型は太陽黒點の極小の時に普通なものゝ如く見え、長い光芒は太陽の赤道に平行に東西に走つてゐる。

天秤座 α 星 (アルゴール種變光星) の極小

四月 分

五 日 午前 四時五十分

十二日 同 四時二十四分

十九日 同 三時五十七分

二十六日 同 三時三十一分

本月中は觀測の好期なり。極小は毎木曜日早朝に起る。